



Title	＜書評＞向井正也著 日本建築・風景論 昭和54年10月 10日刊 相模書房
Author(s)	中西, 徹
Citation	デザイン理論. 1980, 19, p. 127-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53654
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

向井正也著

日本建築・風景論

昭和54年10月10日刊 相模書房

『大層愉快である』『痛烈である』

これが、本著を最初に読んだ時の印象であった。確かに、本著の大部分は、著者独特の潔癖さと、歯に衣を着せぬ言葉で現代建築について、都市計画について、あるいはデザイン一般について批判を縦横無尽に展開している。それは、当世第一の『目きき』のきわめつけであり、また正鵠を得た文明批判でもある。しかもその批判は決して抽象的ではなく、実に具体的であり、また「生々しい」のである。批判の対象は主として大阪・京都・神戸・そして奈良の市街部に集中している。だからこそ、この近辺に住むわれわれにとっては一層「生々しく」感じるのである。

批判の鋒先が自分自身と関係のない対象に向っている間は、見物人にとってこれほど愉快なことはない。しかし、一旦、その鋒先が我が方に向けられるや、将に痛烈であり、また恐怖でさえある。しかもその鋒先は著者自身の作品にまで及び、それをも完膚なきまでこきおろすのである。その筆先は峻烈というほかはない。

著者はいう。「この〈建築・風景論〉の主目標なるものも、要するにそうした〈貧しい街〉の風景に関する意匠学的な考察と批判であり、その意味で在来しばしば試みられた、いわゆる〈都市美〉を求めている景観論というよりは、むしろ〈都市醜〉を具体的に指摘し批判することから、将来の改修再生の道を示唆しようという、いわば啓蒙的な性格を第一義とするものであることをあらためてお断りしておきたい」と。

『哲学的な思索に溢ち、建築・都市計画、デザイン就中環境の本質をつく、まことにアカデミックな著書である』

これが二度目に読んだ時の印象である。本著は先に述べたように痛烈にして、大層愉快的な文明批評ともいうべき批判が全面に流れている。しかし、その批判はジャンナリストイックな浮ついた、底のない、その場かぎりの批判ではなく、その根底に正鵠を得た世界観と哲学に支えられたものであることを知る。その世界観と哲学とは他人の借物ではなく、著者独特のもので、魅力たっぷりである。「デザインとは、小さなコトが全体効果にきわめて

大きくひびく場合があることを知るべきである』といい、また、「ほんの一部分のデザインの質の水準レベルの低下が、〈建築・風景〉の全体効果に重大な影響を与える』という。

このように著者は自己自身のデザイン観、建築観を被露しながら、本書のテーマである「日本建築・風景論」を追求していく。本書には「序文」もなければ「あとがき」もない。それ故、本書の標題が「日本建築と風景論」や「日本の建築と風景」ではなく「日本建築中黒風景論」でなければならぬ理由も本文の中に探さなければならぬ。これもまた著者好みのスタイルである。「建築を〈人間の造った風景〉として〈風景としての建築〉という見方で把えるとともに、一方の自然の風景を〈神の造った建築〉として〈建築としての風景〉という見方で把えるという相互的なアプローチにおいてこそ〈建築・風景〉という文化的環境のトータルな把握への道がひらかれるのではないかと考える。本論の題目をあえて〈日本建築・風景論〉とした所以もまたここにあるわけである』と解題する。すなわち、「と」や「の」ではなく相関関係を示すため、印刷記号の中黒「・」を使ったという。

さて、環境の問題で著者の関心は自然環境ではなく文化環境である。そのアプローチとしてまず風景についての考察から始めようとする。著者は「風景」と「景観」とを区別して次のようにいう。「私の〈風景論〉では、あらゆるものが風景である。在来の意味での風景は、ともすれば景色をもっぱら遠くから全景を見る、パノラミックな見方による、いわば〈遠像〉の問題として取扱う傾向があったと思うが、すでに多くの先人たちがTownscape なるコトバによって展開してきているやり方と同様、私も〈風景〉を、その基本はもとより遠像におくとはいうものの決してそれだけにとどめたくない。否むしろあえてそうしないよう努めたい。〈近像〉と〈遠像〉、〈部分と全体〉を、あたかもズーム・レンズをロングとアップの両極間で融通無礙に自在に往復させ、時と場合で、必要と思われるアングルで〈天工〉と〈人工〉とがからみ合う、都市や集落の〈風景〉の望ましいありかたをさぐり出したい。その意味で私は景観という言葉をやはりこのような風景とは一応区別された、もっぱら景の全体像に関わるものだと考えるのである』つまり、著者は風景をダイナミックにとらえ、また客観的な対象ではなく、われわれ自身もその中に包まれてしまう主観的なものとしてとらえようとするのである。著者は永井荷風の「日和下駄—東京散策記—」（1914）をすぐれた風景論として好意をもってしばしば引用している。日和下駄は小説家荷風の非凡な描写力、旺盛な弥次馬精神を知り得る珠玉の如きエッセイである。日和下駄の中で荷風は「日本の神社と寺院とは、その建築と地勢と樹木との、まことに複雑な綜合芸術である」と述べている。これを著者は「このような日本の一連の環境デザインをまさに英語のランドスケープ・アーキテクチュアというコトバそのままに、一つの〈建築〉すなわち、私のいう〈建築としての風景〉と解すべきだと思うのである』また「日本

人は、ヨーロッパ人のような〈風景としての建築〉構成には、現在なお弱いようだが、反対に〈神の造った建築〉たるランドスケープにならっての、人間の手による〈建築・風景〉づくり（例えば前記〈神域づくり〉など）には絶妙な腕前を発揮する伝統を、今日までもちつづけてきたと考えられる。『そして、このような〈複雑な総合〉は単体の建築を、他の一切のものととの関連を無視して〈排除的〉につくりあげるやり方とは対蹠的な、ローバート・ヴェンチュリーなどのいわゆる〈困難な包括の統一〉(the difficult Unity of inclusion) の能力が必要とされる』と。

著者はこのように日本人の風景についての特性をあげ、それは日本人の「間」を重んじ「型の文化」に支えられていたという。また、全体構成にあたり「排除的な統一」ではなく「包括的な統一」を指向する環境思考が日本人の美德として曾てはあったという。しかるに、現代は「慎しみぶかき」や「礼節」の喪失の結果、バンダルな風景になったと著者は歎くのである。このような、「殺風景」「風景の死」を回生させるためには、「空間的には〈ゆったり〉した、時間的には〈ゆっくり〉したデザインの基本姿勢が求められるのである』という。すなわち、著者は「うるおい」とか「ゆとり」を都市環境形成のカギともいえる概念だと強調するのである。著者はよく東洋的な概念や日常的な言葉を使うのであるが、日本語で語り、漢字に依って思考する限り当然なことである。が、翻訳語で語り、西欧的概念を使う方がより学術的で、漢字や日常語で語るとは素人臭いと軽侮する傾向がある。この点も著者独特のスタイルであり、信念でありまた勇気の賜でもある。

また著者はいう。「景観と風景とはある条件の下では同義語であるが、風景は単なる場景や景観などとは異って、人間の情緒や感情にふかく関わる情景あるいは心景をふくむ点に大きな差違があり、今日の都市景観の問題はなによりもこうした風景論的アプローチによる必要がある』と風景というコトバを大事に、また慎重にとり扱った所以を説明する。

「なお私 また、この〈建築・風景論〉をこれまで、どちらかという、建築空間的にではなく、環境的に、コトバを換えていえば、客観的な景観の問題としてより、むしろ地域住民の心にかかわる風景の問題として云々」というように、著者は「建築・風景」こそ地域住民の心を反映した風景でなければならぬ。と強調し、その風景論に一層奥行を深めるのである。そして将来の展望として「これからの日本の〈建築・風景〉論は狭く皮相的な景観論に墮してはならないと思う。たとえその中で景観の美を問題にしても、その根底はしっかりした歴史的・文明批判的な思考が支えとなっている可きだと思う』と結ぶ。

以上が本著の概略である。本著は都市計画にたずさわる者は勿論、建築家・デザイナーにとっては必携の書であり、関心のあるなしにかかわらず、都市環境に包まれているわれわれにとっても座右の書でもある。

ただ一言注文をつけるとすれば、著者の批判は都市の市街地部に集中しており、現在ど
んどん造られつつあり、これからも一層拍車をかけ造られると思われる郊外都市について
著者の批判が向けられることを希望し、且つその意見を拝聴したいと思う。

また、著者は「いまや〈近代の超克〉が唱えられる段階において〈建築・風景〉の理想
像の追求のうえで西欧を範とすることには限界があるのではないかと考えはじめるに至っ
ている』という。同感である。しからば「日本建築・風景」の理想像とはどのような処に
あるのか、是非これも拝聴したいものである。

(中 西 徹)